巻頭言

「ブッシュの戦争」

中川雄一郎
明治大学教授
協同総研理事長

日本時間の2003年3月20日午前11：00にブッシュ大統領はアメリカ軍に「イラク攻撃」の命令を発した。これはイラクに対する「先制攻撃」である。これは、ブッシュ大統領が、イラクが「大量破壊兵器」をもってアメリカに危害を加えるかもしれないから、と考え、アメリカをイラクの「大量破壊兵器」の暴力から守るために、イギリスのブレア首相を誘って執った行動である―簡単に言えば、そういうことなのである。ブッシュ大統領らしく、本当に単純な発想と行動である。しかし、単純であっても、それが「帝国主義」の行動であることは、もはや誰の目にも明らかである。彼は、アメリカを襲った2001年9月11日のテロリズム以後、イラク、イランそれに北朝鮮の3国を（アメリカにとって）「悪の枢軸」だと公然と言い放ったのである。

イラクが攻撃の矢面に立たされたのは、「イラクには大量破壊兵器があるはずだ」・「イラク政府はオサマ・ビン・ラディンと繋がっているに違いない」という不確かで不明瞭な理由であった。ところが、米英軍のイラクへの侵略が始まると、彼は、「サダム政権は独裁政権で、イラクの人民は抑圧されているので、イラク人民を解放するのだ」という具合に言い換えた。米英軍は「解放軍」だと言うのである。思うに、ブッシュ大統領もブレア首相も、「イラクには大量破壊兵器は存在しないのでは」と考えて、「民主主義」をもちだしてきたのだろう。しかし、本当のところは「石油」の確保であることが、フセイン政権崩壊後に以前に増して明らかになってきたのである。アメリカが自国で生産できる石油の埋蔵量は後10年ももたない、と言われていることはどうも真実らしい。

「小泉政権はブッシュ大統領に追随するだろうな」、と多くの人たちが予想していたが、案の定そうなった。平和憲法をもつ日本政府としては選択肢はいくつもあったのに、小泉政権には「ブッシュに寄り添う」ことが「国益」だと思えたのであろう。憲法がないがしろにされたのだから、日本の国民はもっと怒らなければならない。

「イラク戦争」と命名したのはブッシュ大統領たちであるが、しかし、この戦争に反対した多くの人たちは、この戦争を「ブッシュの戦争」と呼んでいる。この命名は正しいかもしれない。私たちは、戦争反対の声があのように大規模に世界中で湧き起こった歴史を知らない。少なくとも、第2次世界大戦後では初めてのことだろう。世界の多くの人たちは、「ブッシュの戦争」が国際法違反であることを

十分に認識していた。この戦争ほど、正確に言えば、近現代においてこの戦争ほど、その意図が単純で、その意味でまた、分かりやすい、それでいて説得力のない戦争はない、と世界の人たちは一斉にそう思ったからこそ、戦争反対の高まりも大きかったのである。

ブッシュ大統領とその側近にしてみれば、「ブッシュの戦争」はアメリカ国民のより多数の支持がありさえすればそれで実行可能である、そういうものなのだ、と比較的多くのジャーナリストが指摘していたが、果たしてそうであったのである。その意味で、この戦争を支持したアメリカ国民の多くは不幸だと言うべきだろう。何故なら、彼らや彼女たちは、自らが文字通りの「ナイーヴ」であることを世界に知らしめてしまったからである。「ナイーヴ」とは聞こえが良いが、実は、それは、「単純な」・「世間知らずの」・「だまされやすい」という意味であり、精々のところ、「無邪気な」という意味なのである。アメリカの国際的な経済・政治・軍事等々のもっているパワーを考えれば、アメリカ国民は軽々に「ブッシュの戦争」に支持を与えてはならない、という思考を働かせるのが普通だろう。思考停止に陥ってしまったところにアメリカ国民—すべてではないにしても—の悲劇がある、と私たちには思われる。

それでも、私たちには、あのように多くの人たちが一斉に戦争反対の声をあげたことに希望をもつ。「イラク戦争」を「ブッシュの戦争」と呼んだ人たちの市民としての責任感に希望をもつ。地球には、貧困、差別、抑圧それに暴力が散在していることは確かであるが、他方で、これらを克服していこうと活動している人びとが多数いることもまた確かである。紆余曲折はあっても、地球に住む私たちは着実にこれらの害悪を克服していくであろう。そうすることなしには私たちは幸福を手にすることができないのである。協同の力や助け合いの力が、一歩一歩、人びとをそのようにしていくモティヴェーションを授けてくれるのである。「戦争」のための「協力」ではなく、人びとの幸福を支えるための、教育、雇用、環境、社会福祉、コミュニティの質を進展させるための協力・協同を私たちは追い求めていかなければならない。

「ブッシュの戦争」は歴史の事実ではあるが、アメリカ国民の一部が考えるような輝かしい歴史の一齣ではなく、悲しい歴史の一齣である、と私たちは記憶しよう。それは、私たち各個人が「人類の過ち」を正すことのできる１つの手近な歴史アプローチである。